

若く有能な「人財」が増えるフィリピン 九州・沖縄から日比の相互補完関係を

ミンダナオ国際大日本語センター長 町田^{たかかず}隆一

皆さんは、フィリピンと聞いて何を連想されるだろう。犯罪、貧困、紛争、日本人が抱くフィリピンのイメージとは、こうしたものが多いのではないだろうか。

1950年代のフィリピンは、日本に次ぐアジア第2位の経済成長国であり、将来を有望視されていた。その後マルコス政権となり、経済が低迷し「アジアの病人」とまで呼ばれるようになったことは周知の通りである。それから汚職腐敗と貧困が課題となり、世界からマイナスのイメージを持たれるようになってしまった。

2021年6月24日、61歳という若さで多くの国民に惜しまれて亡くなったベニグノ・アキノ前大統領は、公約として「腐敗撲滅とクリーン政治」「政治の透明性の確保と財政健全化」さらに「貧困問題の解消」を掲げ、各分野の解決に取り組んだ。在任期間中、平均6・13%の経済成長率を示し、フィリピンの発展に大きく貢献した。そしてその後を継いだドゥテルテ大統領が、現在コロナ禍にありながらも「麻薬・犯罪・汚職」撲滅及び貧困対策に取り組んでいる。かつて市長を勤めていたダバオ市の治安を大幅に改善した実績を持つドゥテルテ大統領

領により、フィリピンの治安はさらに改善してきている。既にフィリピンのイメージとして、英語留学、ビーチリゾート、美味しいフルーツや大きなショッピングモール、そして近代的な大都市を思い浮かべる外国人も多くなってきたはずだ。日系企業の進出も年々増加しており、多くの日本人がフィリピンで働いている。また、リタイア後のロングステイ先としても人気がある。

フィリピンの主となる言語はフィリピン語（タガログ語）だが、英語も公用語の一つとなっている。アジア諸国の中で唯一の英語圏であるフィリピンは、コールセンターをはじめとするBPO（ビジネス・プロセス・アウトソーシング）が主要産業となっており、売り上げ世界一を誇っている。コールセンターでの就労は、大卒初任給の1・5倍から2倍の収入を得ることができるため、フィリピン人大卒者にとっても人気の就職先となっている。

フィリピンの人口は14年に1億人を突破し、年2%ずつ増加し続けている。28年に1億2300万人に達して日本を抜き、91年まで増え続ける見通しだ。国連データによると、フィリピンの人口ボーナス期間（生

産労働人口と言われる15歳から65歳の労働できる人口が国の人口比に比べて多い期間）は50年まで続くと言われている。生産労働人口が増えていく国は経済的に強くなる。

また、フィリピンの平均年齢は23歳であり、日本の45歳と比べると圧倒的に若い。若者の労働力とエネルギーが、今後のフィリピン経済を発展させていく。英語を話し、その他の言語への適応能力もあり、顧客対応力がある若い「人材」が今後も増え続けるフィリピンの力を借りない手はない。

日本はこれからますます人口が減少していく。既にさまざまな分野において少子高齢化による人手不足が深刻な問題となっている。AI（人工知能）やその他の新しいテクノロジーに頼ろうという取り組みもあるが、それだけでは対応しきれない産業もあるだろう。そこでフィリピンという、これから若い力でどんどんエネルギーギッシュになっていく国から、有能な人材の力を借りる必要が出てくるのではないか。日本で働いてもらうというやり方もあれば、BPO（ビジネスプロセスアウトソーシング）でフィリピンに発注するというやり方もある。

一方、フィリピンはASEAN（東南アジア諸国連合）の中でも失業率が高く、大学を卒業してもまともな仕事に就くのが簡単ではないという現状がある。労働力が必要な日本、そして労働供給先を必要としているフィリピンは、今後ますます相互補完的な関係が強まると感じる。

今後の日比の相互補完関係を強めていくために、具体的な例を紹介したい。私が現在勤めているミンダナオ国際大学（フィリピン、ダバオ市）は、フィリピン日系人会が主体となり運営している。大学としての規模はまだ小さいが、日比両国の交流の起点となり始めている。17年には安倍首相（当時）ご夫妻、そして19年には河野外相（当時）も訪問された。本学は介護士を目指す社会福祉学科を備えており、多くの卒業生が日本のさまざまな地域の社会福祉法人にお世話になっている。

ある九州の社会福祉法人は、将来の幹部候補生を毎年ダバオで研修させ、自分たちの施設で働いているフィリピン人介護士がどんな所で育ち、どんな教育を受けているのか、そして日本とフィリピンの介護施設や

介護方法の違いなどを学び、国際感覚を身に付けさせるという取り組みを行っている。また別の社会福祉法人は、日本語講師を本学に派遣して特別コースを作り、同施設での介護のやり方や日本語をフィリピン人学生に教え、日本に行くために必要な最低限の力をつけさせるというユニークな取り組みを行っている。また、併設している日系人会国際学校でも、日本の自動車メーカーから、自動車整備士の育成プロジェクトを立ち上げたいという話も上がっている。

こうした双方向的な広がりからグローバル展開を行い、企業の発展戦略につなげていくことも可能はずである。日比両国の人材交流を九州・沖縄から活性化させ、フィリピンの有能な若者が大いに活躍できる、明るい未来を期待したい。

